



藪 の 中

芥川龍之介



青空文庫



青空
文庫

検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございませぬ。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処でございますか？ それは山科の駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつたまま、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたようでございます。いえ、血はもう流れては居りませぬ。傷口も乾いて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございませぬ。ただその側の杉の根がたに、縄が一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄のほかにも櫛が一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございませぬ。何、馬はいなかつたか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございましょう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗つた女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確かに法師髪の馬のようでございました。丈でございますか？ 丈は四寸もございましたか？

——何しろ沙門の事でございますから、その辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り籠へ、二十あまり征矢をさしたの
は、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかやうになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、真に人間の命なぞは、如露亦如電に違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、氣の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？　これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人（ぬすびと）でございます。もつともわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口の石橋（いしばし）の上に、うんうん呻（うな）つて居りました。時刻でございますか？　時刻は昨夜（さくや）の初更（しよこう）頃（ころ）でございます。いつぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺（こん）の水干（すいかん）に、打出（うちだ）しの太刀（たち）を佩（は）いて居りました。ただ今はそのほかにも御覽の通り、弓矢の類（たすき）さえ携（たず）せて居ります。さようでございますか？　あの死骸の男が持つていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございませぬ。革（かわ）を巻いた弓、黒塗りの箆（えびら）の鷹（たか）の羽（は）の征矢（そや）が十七本、——これは皆あの男が持つていたものでございませう。はい。馬もおつしやる通り、法師（ほうし）髪（がみ）の月毛（つきげ）でございます。その畜生（ちくしよう）に落されるとは、何かの因縁（いんねん）に違いございませぬ。それは石橋の少し先に、長い端綱（はづな）を引いたまま、路（みち）ばたの青芒（あおすすき）を食（た）つて居りました。

この多襄丸（たじようまる）と云うやつは、洛中（らくちゆう）に徘徊（わい）する盗人（たうじん）の中でも、女好きのやつでございます。昨年（とし）の秋鳥部寺（とりべでら）の賓頭（びんずる）廬（うら）の後の山（やま）に、物詣（ものもぎ）で来たらしい女房（にようぼう）が一人、女の童（わらわ）と一しよに殺（ころ）されたのは、こいつの仕業（しわざ）だとか申（ま）して居りました。その月毛（つきげ）に乗（の）つていた女（め）も、こいつがあつた男（おとこ）を殺（ころ）したとなれば、どこへどうしたかわかりませぬ。差出（さしで）がましゆうでございませうが、それも御詮議（ごせんぎ）下さいませ。

検非違使に問われたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございませぬ。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい氣立でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございませぬ。

娘でございますか？ 娘の名は真砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘のほかには、男を持った事はございませぬ。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立ったのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いでございますから、たとい草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

×

×

×

多襄丸の白状 たじょうまる

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行つたのか？

それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問ごうもんにかけられても、知らない事は申されません。その上わたしもこうなれば、卑怯ひきょうな隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日きのうの午少ひるし過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩にょぼさつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とつさの間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りつぱに生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の

心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科の駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、この古塚を発いて見たら、鏡や太刀が沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪の中へ、そう云う物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時はんときもたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けていたのです。

わたしは藪の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に渴かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つていと云うのです。またあの藪の茂つてゐるのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまつたのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町ほど行つた処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでゐる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手

を組み伏せました。男も太刀を佩はいているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括くくりつけられてしまいました。縄なわですか？ 縄は盗人ぬすびとの有難ありがたさに、いつ扉を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張ほおばらせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星ずぼしに当たつたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠いちめがさを脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛しばられている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐ふところから出していたか、きらりと小刀さすがを引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈はげしい女は、一人も見ただ事ありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらを突かれたでしょう。いや、それは身を躲かわしたところが、無二無三むにむざんに斬り立てられる内には、どんな怪我けがも仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多裏丸たじようまるですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀さすがを打ち落しました。いくら気の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後あとに、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣遣いのように縋すがりつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、

どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥はじを見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添そいたい、——そうも喘あえぎ喘あえぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷ざんてくな人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳ひとみを見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴かみなりに打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭ねんとうにあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑いやしい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒けたおしても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀たちに、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那せつな、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯ひきょうな殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた上、太刀打ちをしろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた繩なので。）男は血相けつそうを変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利きかず、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目じゅうめに、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つて居るのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉のどに、断末魔だんまつまの音がするだけです。事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路やまみちへ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事ことは申し上げるだけ、無用の口数くちかずに過ぎますまい。ただ、都みやこへはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は檣おうちの梢こずえに、懸ける首と思つていますから、どうか極刑ごくけいに遇わせて下さい。（昂然こうぜんたる態度）

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちやうどその途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやっと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りな

がら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌わしように、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂けそうな胸を抑えながら、夫の太刀を探しましたが、あの盗人に奪われたでしょう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀だけは、わたしの足もとに落ちています。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言云つたのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、氣を失つてしまったのでしよう。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力が

なかつたのです。小刀さすを喉のどに突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢じまんにはなりませんまい。(寂しき微笑) わたしのように腑甲斐ふがないものは、大慈大悲の觀世音菩薩かんぜおんぼさつも、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人ぬすびとの手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——(突然すずりなき烈しき歎なげ)

巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人^{ぬすびと}は妻を手ごめにする、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利^きけない。体も杉の根に縛^{しば}られている。が、おれはその間^{あいだ}に、何度も妻へ目くぼせをした。この男の云う事を真^まに受けるな、何を云つても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思つた。しかし妻は悄然^{しやうぜん}と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやつている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つて見えるように見えないか？ おれは妬^{ねたま}しさに身悶^{みもだ}えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添つているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆^{だいたん}にも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡^{もた}げた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有^{ちゆうゆう}に迷つていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔^{しん}恚^いに燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇^{やみ}の中に、いまほどおれも苦しみはしない。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色^{がんしよく}を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生

きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様さかさまにおれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるうか？ 一度でもこのくらい呪わしい言葉が、人間の耳に触れた事があるうか？ 一度でもこのくらい、——（突然 迸るほとばしることとき嘲笑ちやうしやう）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがっている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒けたおされた、（再び迸るふたたびることとき嘲笑ちやうしやう）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ領うなずけば好よい。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫ぶが早いかな、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟とつさに飛びかかったが、これは袖そでさえ捉とらえなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後のち、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄なわを切った。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟つぶやいたのを覚えてる。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がある。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？（三度みたび、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに来ない。ただ杉や竹の杪に、寂しい日影が漂っている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇が立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまった。……………

(大正十年十二月)



藪の中

芥川龍之介 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「芥川龍之介全集 4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 1 月 27 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 7 月 15 日第 8 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

※ 底本の中見出しは、ゴシック体で組まれています。-> ヒラギノ角ゴシック ProN W6 にしました。

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997 年 11 月 10 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ